

保育者養成校における学生の体験活動に関する一考察

—体験活動の実態と計量テキスト分析からの検討—

庄子 佳吾 (愛知文教女子短期大学)・及川 未希生 (盛岡大学短期大学部)

A Study on Experiential Activities of Students at Training Schools for Childcare Workers: Following the Actual Situation of Experiential Activities and Quantitative Text Analysis

Keigo Shoji, Mikio Oikawa

Abstract

The aim of this study is to conduct an awareness survey of students at training schools for childcare workers to quantitatively clarify the actual situation of experiential activities and their awareness of experiential activities, and to obtain suggestions on how to provide support in the training stage. As a result, as for the actual conditions of the experiential activities of the students at training schools for childcare workers, there are no shortage in terms of quantity including nature experience, but lack of qualitative aspects such as type and content. In addition, it is found that the experience and play for infants are practices on the basis of principle of early childhood education, and are recognizes as developing a foundation for children to embrace a zest for living. From these results, it is considered that students at training schools for childcare workers are required to provide support through learning through direct experience and diversity in understanding infants.

要旨

本研究では、保育者養成校の学生を対象に意識調査を実施し、体験活動の実態と体験活動に対する意識について計量的に明らかにし、養成段階で取り組むべき支援の在り方について示唆を得ることを目的とした。その結果、保育者養成校の学生の体験活動の実態としては、自然体験をはじめ量的な面での不足は見られなかったものの、種類や内容といった質的な面が不足していることが示唆された。また、幼児にとっての体験や遊びは幼児教育の基本原理に基づき実践され、生きる力の基礎を育むもの、保育内容の5領域全てに関わるものであり、相互的・総合的に幼児の育ちにつながるものとして認識していることが分かった。これらより、保育者養成校の学生には直接体験による学びと幼児理解の多様性が得られる支援が求められていると考えられた。

Keywords : pre-service childcare workers training, early childhood education, experiential activities, play, quantitative text analysis

キーワード : 保育者養成、幼児教育、体験活動、遊び、計量テキスト分析

I. 諸言

2017年に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時に改訂（定）され、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園は「幼児教育施設」として位置づけられた。幼児教育施設では、「生きる力¹⁾」の基礎を育むために幼児教育で育てる要素が「資質・能力」という3つの柱として示された。その「資質・能力」をどのように育てればよいのかを示したものが「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の保育内容の5領域に示された「ねらい」と「内容」であり、5領域を通じて育みたい具体的な子どもの姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」という。）が示された。これにより、保育課程の編成や保育者が指導を行う際に考慮することが明確になり、これらをイメージして日々の教育・保育を行っていくこととなった。今次の改訂（定）は小学校以降の教科学習を先取りして行うものではなく、幼児期にふさわしい生きる力の基礎を育み、共有すべき事項を明確にしたことで小学校以降の教育との接続の強化が図られたと言える。そして、3法令ともに一貫して、幼児は身近な環境に自発的・主体的にかかわるといふ直接的・具体的な体験を通して、成長・発達していくという特性を踏まえ、保育者には幼児の発達に必要な体験が得られる適切な環境を構成していくことが求められている。これに関連して、幼児期からの体験活動²⁾の重要性について、第3期教育振興基本計画³⁾でも「子供たちが達成感や成功体験を得たり、課題に立ち向かう姿勢を身に付けたりすることができるよう、様々な体験活動の充実を図る」等に明示されており、今後一層の拡充が掲げられている。

また、これまでの体験活動に関する独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下、「機構」という。）の調査によれば、自然体験や生活体験、お手伝いを多く行っている子どもは、自律性・積極性・協調性といった自立的行動習慣が身についていること⁴⁾、子どもの頃にお手伝いや家族行事、遊びに熱中するなど様々な体験をした人ほど社会を生き抜く資質・能力が高いこと⁵⁾等が報告されており、感性的成長が著しい幼児

期に自然体験をはじめとした様々な原体験を得ることは、豊かな人間性・社会性を育む上で大切な基盤となることが明らかになっている。

このように、幼児期の体験活動の重要性については多方面から支持がなされている。井上⁶⁾は保育現場では、園庭の自然環境は一定程度、整備されており、園内の自然体験活動も比較的よく実施されていると報告しており、意図的・計画的に子どもの実態に対応した活動が展開されていると考えられる。その一方で、井上⁷⁾は、若い保育者や保育者を志望する学生に生活体験や自然体験が不十分なために「保育者を志望する学生の実態と自然とのかかわりを援助できる保育者像には隔たりがあると考えられ、保育者養成にはその間隙を埋める教育が従来よりも求められている」と問題を提起している。同様の問題意識から養成段階での在り方を論じたものとして、大橋⁸⁾は「子ども時代の自然体験が、自然への関わり方、そして保育者として子どもとの関わりに自然体験を取り入れることに影響を及ぼしている」ことや高野⁹⁾は野外体験、自然体験に関する意識調査を実施し、学生の体験の多寡による幼児への自然教育に対する意識の差異と保育者養成における野外教育の有効性を報告している。

この他、国内の先行研究では、子どもの自然との関わりを援助するために、自然体験活動や野外活動実習における授業実践が学生に好影響を及ぼすという報告は蓄積されているものの、保育者養成校の学生の体験活動の実態と意識については十分に検討されてきたとは言い難い。そこで本研究では、保育者養成校の学生を対象に意識調査を実施し、学生の体験活動の実態を把握するとともに、学生が持つ体験活動に対する意識について計量的に明らかにし、養成段階で取り組むべき支援の在り方について示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

本研究の対象は、東北地方のX大学短期大学部、東海地方のY短期大学に所属する保育者養成課程の学生349名のうち、研究同意及び回答の得られた349名（回収率100%）を分析対象と

表 1. 調査対象の内訳

	X大学短期大学部		Y短期大学		計	
	男	女	男	女	男	女
1年生	6	92	0	153	6	245
2年生	3	95	0	0	3	95
計	9	187	0	153	9	340
総計	196		153		349	

した(表1)。なお、後述する体験活動の実態における全国調査との比較では、本研究の対象者は男女比率において、男性の割合が著しく低いいため、結果の一般化に支障があると判断し、男性9名のデータを除く340名を分析対象とすることとした。

2. 調査方法及び内容

調査方法は質問紙調査とし、筆者らが配布、回収した。質問紙は、体験活動の実態を把握するため、機構が実施した「青少年の体験活動等に関する意識調査(平成28年度調査)」(以下、「全国調査」という。)のうち、自然体験(9項目)、生活体験(6項目)、社会体験(3項目)に関する選択項目(計18項目)と、体験活動に対する意識を調査するため、「幼児にとって『体験』や『遊び』をすることはどのようなものだと思いますか」という自由記述項目から構成した。選択項目の回答方法は、全国調査と同様に、各項目ともに、これまでに体験したことがあるかを「何度もある」「少しある」「ほとんどない」の3件法を用いて回答を求めた。なお、本調査は2019年4月～10月に実施した。

3. 分析方法

(1) 体験活動の実態

自然体験、生活体験、社会体験に関する18項目ごとの回答(順序尺度)を「何度もある」を1点、「少しある」を2点、「ほとんどない」を3点と得点化、割合を算出し、本研究の対象者と全国調査の対象者でその割合に差が見られるかを 2×3 の χ^2 検定を用いて分析を行った。比較対象とする全国調査のデータについては、機構より二次利用の許可を得て、貸与を受けたものを用いた。なお、全国調査が実施され

た2016年度の高等学校(2年生)の生徒は現在の大学生世代に当たることから、その内の女子生徒(2,803名)を比較対象に設定した。また、全国調査では回答比率を層の大きさを重みとした重みつき集計値を用いて算出しているが、記述統計量は報告されていない。そこで、本研究では個票データから再集計して得た実測値を分析に用いた。全ての統計処理には、IBM SPSS Statistics 26を使用し、有意水準は5%未満とした。

(2) 体験活動に対する意識

「幼児にとって『体験』や『遊び』をすることはどのようなものだと思いますか」という自由記述項目に記載されたテキストデータを使用し、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析には、樋口¹⁰⁾が開発したKH Coder Version 3.Beta.01(以下、「KH Coder」という。)を用いた。

KH Coderでは、テキストデータを単語や句に分節し、形態素解析¹¹⁾を行った上で、出現数や単語間の相関関係を抽出するために、言及頻度分析を行った。分析内容は以下のとおりである。

- ①言及頻度分析では、まず自由記述の各項目で得られた語のうち、上位50位の頻出する語(以下、「頻出語」という。)を抽出・整理しその出現傾向を検討した。
- ②抽出された頻出語について、保育者養成校における学生の体験活動に対する意識としてどのような特徴が見られるかを探索・類型化するため、階層的クラスタ分析を行った。
- ③抽出された頻出語間の文脈から保育者養成校における学生の体験活動に対する意識を統計的に分析するため、共起ネットワーク分析を行った。

なお、以上の分析のうち、②及び③において

はKH CoderのKWICコンコーダンス¹²⁾機能(以下、「コンコーダンス」という。)を用いて、頻出語がどのような文脈で出現したか、それらの語の前後にどのような単語が共起しているかについても検討した。また、分析過程では、誤字脱字及び「子供」「子ども」といった表記ゆれについては、研究者間で確認、判断し、修正することでデータ解釈の信頼性と妥当性を確保した。

4. 倫理的配慮

調査対象者が質問紙に回答する前に、研究目的と内容、研究協力は自由意志であり授業や成績には関係しないこと、個人情報保護の厳守、結果の公表については学術研究の目的でのみ使用されること、質問紙は研究終了後、適切な方法で廃棄処理することを筆者らより口頭及び書面にて説明し、質問紙の提出をもって研究協力の同意を得るものとした。なお、本研究は愛知文教女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。また、本研究に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業・団体等はない。

Ⅲ. 結果

1. 体験活動の実態

保育者養成校における学生の体験活動の実態について、全国調査との比較結果を表2に示した。本研究の対象者と全国調査の対象者で体験活動の多寡について連関性を見るために2×3の χ^2 検定を行ったところ、【自然体験】の項目では、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究56.5%、全国調査46.1%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究15.0%、全国調査22.4%であり、0.1%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 15.34, p < .001, \text{Cramer's } V = .07$)。「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究44.7%、全国調査38.1%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究19.7%、全国調査24.6%であり、5%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 6.62, p < .05, \text{Cramer's } V = .05$)。「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究29.4%、全国調査36.7%、「ほとんどない」と回答した割合が本

研究32.1%、全国調査27.6%であり、1%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 15.33, p < .01, \text{Cramer's } V = .07$)。「キャンプをしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究33.8%、全国調査29.8%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究25.0%、全国調査33.0%であり、5%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 8.97, p < .05, \text{Cramer's } V = .05$)。また、この他の項目では、本研究と全国調査間に有意な差は認められなかったが、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」を除く4項目で本研究の対象者の方が全国調査に比べ「何度もある」と回答した割合が高く、9項目のうち7項目において「何度もある」と回答した割合が全国調査を上回っていた。

【生活体験】の項目では、「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究85.0%、全国調査76.1%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究0.9%、全国調査2.2%であり、0.1%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 13.97, p < .001, \text{Cramer's } V = .07$)。「道路や公園などに捨てられているゴミを拾ったりしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究40.0%、全国調査33.3%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究9.1%、全国調査16.8%であり、0.1%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 15.33, p < .001, \text{Cramer's } V = .07$)。「弱い者いじめやケンカをやめさせたり、注意したこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究12.4%、全国調査10.7%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究37.2%、全国調査45.3%であり、5%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 8.19, p < .05, \text{Cramer's } V = .05$)。「赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究27.9%、全国調査20.6%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究37.1%、全国調査55.5%であり、0.1%水準で有意な差が認められた($\chi^2(2) = 41.95, p < .001, \text{Cramer's } V = .12$)。「小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究78.5%、全国調査57.6%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究1.8%、全国調査11.2%であり、0.1%水準で有意な差が認められ

た ($\chi^2(2) = 61.86, p < .001, \text{Cramer's } V = .14$)。また、本研究と全国調査間に有意な差は認められなかったが、「タオルやぞうきんを絞ったこと」も本研究の対象者の方が全国調査に比べ「何度もある」と回答した割合が高く（本研究98.5%、全国調査96.0%）、全項目において「何度もある」と回答した割合が全国調査を上回っていた。

【社会体験】の項目では、「体の不自由な人、お年寄り、困っている人などの手助けをしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究31.5%、全国調査26.0%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究14.4%、全国調査19.5%であり、5%水準で有意な差が認められた ($\chi^2(2)$

$= 7.64, p < .05, \text{Cramer's } V = .05$)。「お墓参りをしたこと」は、「何度もある」と回答した割合が本研究89.4%、全国調査79.2%、「ほとんどない」と回答した割合が本研究2.9%、全国調査5.2%であり、0.1%水準で有意な差が認められた ($\chi^2(2) = 19.95, p < .001, \text{Cramer's } V = .08$)。また、本研究と全国調査間に有意な差は認められなかったが、「外国の人と交流したり一緒に生活したりしたこと」も本研究の対象者の方が全国調査に比べ「何度もある」と回答した割合が高く（本研究13.8%、全国調査13.2%）、全項目において「何度もある」と回答した割合が全国調査を上回っていた。

表2. 保育者養成校における学生の体験活動の実態と全国調査との比較

区分	項目	調査種別 本研究 (n=340) 全国調査 (n=2,803)	回答別(%)			χ^2	Cramer's V
			何度もある	少しある	ほとんどない		
	チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと	本研究	56.5%	28.5%	15.0%	15.34 ***	.07
		全国調査	46.1%	31.5%	22.4%		
	海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと	本研究	44.7%	35.6%	19.7%	6.62 *	.05
		全国調査	38.1%	37.2%	24.6%		
	大きな木に登ったこと	本研究	35.3%	30.6%	34.1%	3.69	.04
		全国調査	30.2%	32.9%	36.9%		
	ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと	本研究	19.1%	32.1%	48.8%	.94	.02
		全国調査	20.5%	33.4%	46.1%		
【自然体験】	太陽が昇るところや沈むところを見たこと	本研究	29.4%	38.2%	32.1%	15.33 **	.07
		全国調査	36.7%	35.7%	27.6%		
	夜空いっばいに輝く星をゆっくり見たこと	本研究	50.6%	38.2%	11.2%	4.33	.04
		全国調査	49.4%	35.3%	15.3%		
	野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと	本研究	54.4%	32.4%	13.2%	5.87	.04
		全国調査	49.0%	32.9%	18.1%		
	海や川で泳いだこと	本研究	60.0%	30.3%	9.7%	2.64	.03
		全国調査	59.5%	27.9%	12.6%		
	キャンプをしたこと	本研究	33.8%	41.2%	25.0%	8.97 *	.05
		全国調査	29.8%	37.1%	33.0%		
	ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと	本研究	85.0%	14.1%	0.9%	13.97 ***	.07
		全国調査	76.1%	21.7%	2.2%		
	タオルやぞうきんを絞ったこと	本研究	98.5%	1.5%	0.0%	5.84	.04
		全国調査	96.0%	3.5%	0.5%		
【生活体験】	道路や公園などに捨てられているゴミを拾ったりしたこと	本研究	40.0%	50.9%	9.1%	15.33 ***	.07
		全国調査	33.3%	49.9%	16.8%		
	弱い者いじめやケンカをやめさせたり、注意したこと	本研究	12.4%	50.4%	37.2%	8.19 *	.05
		全国調査	10.7%	44.0%	45.3%		
	赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと	本研究	27.9%	35.0%	37.1%	41.95 ***	.12
		全国調査	20.6%	23.9%	55.5%		
	小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと	本研究	78.5%	19.7%	1.8%	61.86 ***	.14
		全国調査	57.6%	31.1%	11.2%		
	体の不自由な人、お年寄り、困っている人などの手助けをしたこと	本研究	31.5%	54.1%	14.4%	7.64 *	.05
		全国調査	26.0%	54.5%	19.5%		
【社会体験】	外国の人と交流したり一緒に生活したりしたこと	本研究	13.8%	32.4%	53.8%	.20	.01
		全国調査	13.2%	33.4%	53.4%		
	お墓参りをしたこと	本研究	89.4%	7.6%	2.9%	19.95 ***	.08
		全国調査	79.2%	15.5%	5.2%		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

2. 体験活動に対する意識

(1) 頻出語と出現傾向

幼児期における「体験」や「遊び」に対する記述は、768文が抽出され、総抽出語数は14,759語であった。また、この中から語の重複などを整理した結果、996語が抽出された。さらに、助詞や助動詞といったどの文にも出現する語を除いた結果、分析対象として5,805語、異なり語数770語が抽出された。頻出語（上位50位）を抽出した結果は表3に示したとおりである。100以上の出現回数を持つ単語は6語見られた。その内訳は、「思う」（374回）、「体験」（266回）、「遊び」（257回）、「幼児」（128回）、「さまざま」（108回）、「子ども」（103回）であった。これは「幼児にとって『体験』や『遊び』をすることはどのようなものだと思いますか」という質問に対応した結果、出現回数が多かったと考えられる（たとえば、「幼児にとって体験や遊びは…だと思う」といった記述が多く見られた。）。

また、50以上100未満の出現回数の単語は10語見られた。その内訳は、「経験」（98回）、「成長」（91回）、「学ぶ」（81回）、「大切」（80回）、「たくさん」（72回）、「遊ぶ」（58回）、「体」（52回）、「必要」（52回）、「考える」（50回）、「自分」（50回）であった。なお、出現回数50未満の語において、

50以上の語で見られた「成長」に関連した「発達」「将来」「人生」「大きい」のような発育発達に関する語が、「大切」「必要」に関連した「重要」のような有用性に関する語が見られた。

頻出語（上位50位）全体で見ると、「知る」「感じる」「得る」といった能力や知識、技術などの獲得につながる語も確認された。

(2) 階層的クラスター分析

次に抽出された頻出語（上位50位）について、階層的クラスター分析を行った。クラスター分析とは、テキストデータ全体において、似ている語をまとめる、つまりクラスターを形成していく分析方法である。各抽出語や出現パターンの類似性から、テキストデータの特徴を探索・類型化することができる。本研究では、クラスター分析の結合方法にはward法、類似性の指標にはJaccard係数¹³⁾を用いた。また、併合水準の値の段階並びにその後の解釈を考慮し、視覚的に構造化しやすいクラスター数として7を設定した。分析の結果はデンドログラム（樹状図）として構造化されるが、本研究では、視認性を高めるためにクラスター単位で描画するとともに、クラスターを囲む点線並びに語の出現回数を筆者が追記した（図1）。

表3. 幼児期における「体験」や「遊び」に対する意識の頻出語（上位50位）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	思う	374	18	発達	43	33	身体	23
2	体験	266	19	楽しい	40	33	大人	23
3	遊び	257	20	自然	37	37	人生	22
4	幼児	128	21	人	36	37	大きい	22
5	さまざま	108	22	知識	35	39	友達	21
6	子ども	103	23	身	34	40	コミュニケーション	19
7	経験	98	23	豊か	34	40	興味	19
8	成長	91	25	生きる	32	40	子	19
9	学ぶ	81	26	知る	31	40	想像	19
10	大切	80	26	良い	31	40	動かす	19
11	たくさん	72	28	将来	29	40	力	19
12	遊ぶ	58	29	重要	28	46	多く	18
13	体	52	30	心	27	47	ルール	17
13	必要	52	31	感情	24	47	関係	17
15	考える	50	31	触れる	24	47	生活	17
15	自分	50	33	感じる	23	47	多い	17
17	いろいろ	49	33	感性	23	47	得る	17

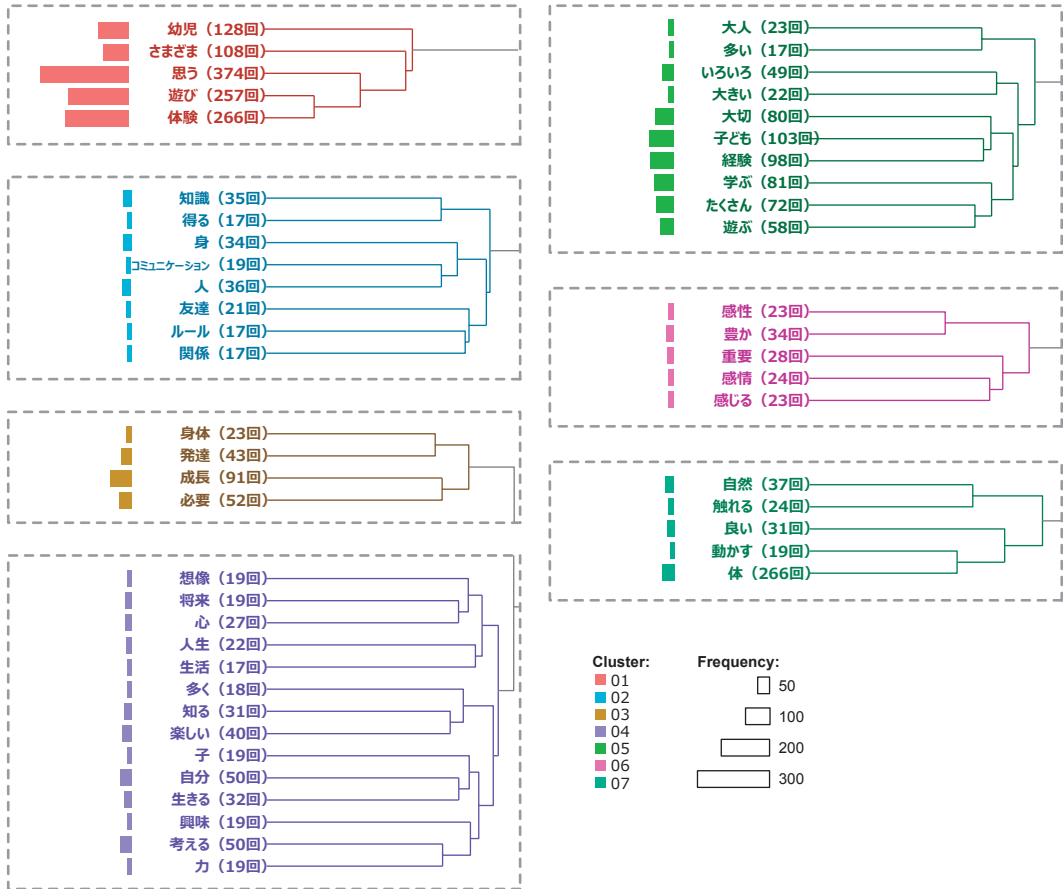


図1. 幼児期における「体験」や「遊び」に対する意識の階層的クラスター

クラスターは7つに分割されており、最大のクラスターは14の単語が結合されたクラスター4である。各クラスターの結果は以下のとおりである。なお、コンコーダンスによる分析結果において、同クラスター以外の単語が共起した場合には、便宜上、筆者が下線を追記している。

クラスター1では、「思う」「体験」「遊び」「幼児」「さまざま」が抽出された。コンコーダンスを用いて分析した結果、「思う」(374回)は「体験」(53回)、「大切」(43回)、「遊び」(36回)などが共起していた。「体験」(266回)は「遊び」(149回)、「さまざま」(69回)、「幼児」(53回)、「遊び」(257回)は「さまざま」(43回)、「幼児」(31回)、「幼児」(128回)は「さまざま」(26回)などが共起していた。

クラスター2では、「人」「知識」「身」「友達」「コ

ミュニケーション」などの語が抽出された。「人」(36回)は「関わり」(7回)、「コミュニケーション」(5回)などが共起していた。「知識」(35回)は「身(につく)」(7回)、「得る」(6回)、「経験(する)」(6回)、「身」(34回)は「能力」(5回)などが共起していた。「友達」(21回)は「遊ぶ」(4回)、「たくさん」「作る」「同土」(2回)、「コミュニケーション」(19回)は「能力」(8回)、「学ぶ」(4回)などが共起していた。

クラスター3では、「成長」「必要」「発達」「身体」が抽出された。「成長」(91回)は対象(28回)（「子ども」(18回)「幼児」(10回)）に対して共起していた。「必要」(52回)は「成長」(15回)、「不可欠」(4回)、「発達」(43回)は「身体」(11回)、「成長」(8回)、「機能」(7回)、「身体」(23回)は「機能」(4回)と共起していた。

クラスター4には、全クラスター中で最も多い語が分類された。頻出順は「自分」「考える」「楽しい」「生きる」「知る」「将来」「心」「人生」などである。「自分」(50回)「自身」(3回)、「考える」(6回)、「好き」(4回)、「考える」(50回)は「力」(6回)、「遊び」(7回)などが共起していた。「楽しい」(40回)は「遊ぶ」(6回)、「(体を)動かす」(3回)、「生きる」(32回)は「力」(6回)、「必要」(6回)などが共起していた。「知る」(31回)は「(知ら)ない」(7回)、「機会」(3回)、「遊び」(5回)などが共起していた。

クラスター5では、「子ども」「経験」「学ぶ」「大切」「たくさん」などの語が抽出され、「遊び」との共起関係にある単語が多く見られた。「子ども」(103回)は「成長(する、できる)」(18回)、「遊び」(18回)などが共起していた。「経験」(98回)は「たくさん」(14回)、「遊び」(11回)、「さまざま」(8回)、「学ぶ」(81回)は「遊び」(17回)、「たくさん」(12回)などが共起していた。「大切」(80回)は「遊び」(9回)、「経験」(8回)、「たくさん」(72回)は「体験」(19回)、「遊び」(18回)が共起していた。

クラスター6では、「豊か」「重要」「感情」「感性」「感じる」が抽出された。「豊か」(34回)は「感性」(14回)、「感情」(10回)、「想像」(5回)などが共起していた。「重要」(28回)は「(だ)と 思う」(15回)、「遊び」(3回)、「感情」(24回)は「(が) 生まれる」(3回)、「(を) 育てる」(3回)などが共起していた。「感性」(23回)は育ち(4回)、「(が) 育つ」(2回)、「(を) 育てる」(1回)、「(を) 育む」(1回)に関する語、「感じる」(23回)には「感情」(2回)、「考える」(1回)が共起していた。

クラスター7では、「体」「自然」「良い」「触れる」「動かす」が抽出された。「体」(266回)は「(を) 動かす」(16回)、「遊び」(6回)、「たくさん」(5回)、「自然」(37回)は触れる(16回)、「(に) 触れる」(9回)、「(と) 触れ合う」(7回)に関する語、「体験」(9回)などが共起していた。「良い」(31回)は「経験」(4回)、「影響」(2回)、「循環」(2回)、「触れる」(24回)は「さまざま」(5回)、「見る」(3回)、「体験」(3回)、「動かす」(19回)は「楽しい」(3回)、「体験」(2回)などが共起していた。

(3) 共起ネットワーク分析

次に抽出された頻出語(上位50位)について、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析とは、単語が共通に出現する関係(共起関係)を円と線で結んだネットワークとして描画し、視覚的に構造化する分析方法である。KH Coderにおける共起ネットワーク分析では「比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示す『サブグラフ検出』¹⁹⁾がある。本研究では、各要素間の関連性を確認するために、「サブグラフ検出・modularity」を選択し、各項目における学生の体験活動に対する意識を可視化した。

分析の結果、共起ネットワークは7つのサブグラフに分かれた(図2)。その際、サブグラフを囲む点線は視認性向上のために筆者が追記したものである。なお、強い共起関係ほど濃い線、出現頻度の多い単語ほど大きい円で描画されており、同じサブグラフに含まれる語は実線で結ばれ、互いに異なるサブグラフに含まれる語は破線で結ばれている。また、本研究では、集計単位を「セル」としているため、「文」や「段落」を集計単位とするよりも、Jaccard係数が低くなる傾向がある。そこで、共起関連の強弱のみを検討するために、描画した際に視認性の高い係数として0.1と設定した。よって、この図には出現頻度が多くともJaccard係数が0.1未満の語は表示しておらず、また、図中の語や円同士配置は意味をもたない。

サブグラフを個別に見た結果、サブグラフ①(以下、丸囲み数字はサブグラフの番号01~07を表す。)では、「体験」を中心に「遊び」「思う」「さまざま」が結びついており、「思う」を中心に「子ども」「大切」が、「遊び」を中心に「幼児」「学ぶ」「考える」が結びついていた。②では、「身」が結節点となり、「自然—触れる—自分」「知識—得る」「人—コミュニケーション—友達」と結びついていた。③では、「体」を中心に「動かす」「心」「良い」が、さらに「動かす—楽しい—知る」と結びついていた。④では、「成長」が結節点になり、「必要—生きる」「発達—身体—想像」と結びついていた。⑤では、「重要—感じる—感情—感性—豊か」が結びついていた。⑥では、「たくさん」を中心に「遊ぶ」「いろいろ」

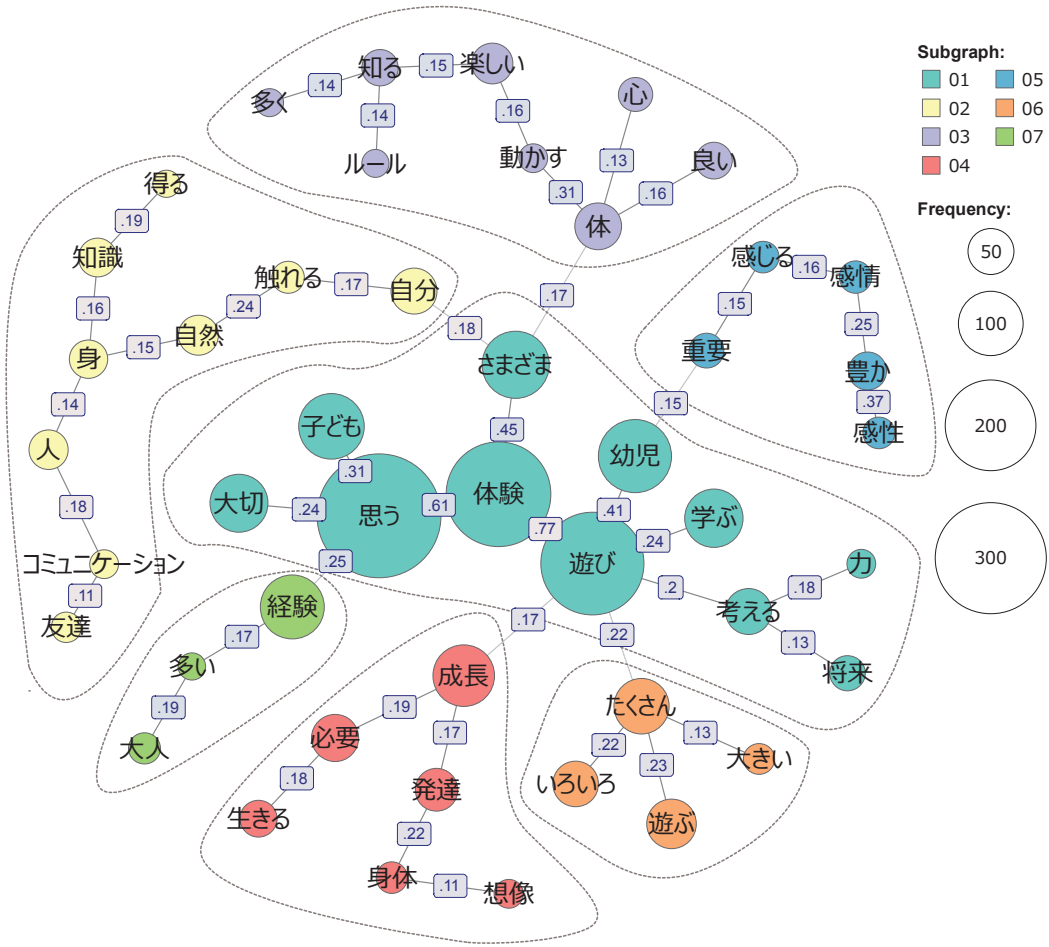


図2. 幼児期における「体験」や「遊び」に対する意識の共起ネットワーク (サブグラフ検出・modularity)

「大きい」が結びついていた。⑦では、「経験—多い—大人」が結びついていた。

続いて、それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを探索するため、語の「媒介中心性」を基準とした共起ネットワークを作成した。これは、保育者養成校における学生が体験活動に対して、特に意識していることを確認するためであり、分析指標は次数中心性を用いた。分析の結果は図3に示したとおりである。なお、語の色分けは白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示している。

語の中心性を個別に見た結果、最も中心性

が高かった語は「体験」「遊ぶ」「さまざま」であった。コンコーダンスを用いて分析した結果、「幼児」との共起関係が強く、「幼児にとってさまざまな体験や遊びをすることは学び」、「たくさん吸収できる幼児だからさまざまな体験や遊びをして、人生の基盤となる」、「さまざまな体験や遊びは、幼児の発達になくはならないもの」などの文脈で出現していた（以下、下線は語の共起関係をもとにした筆者による追記である。）。なお、ここで共起関係にあった「幼児」もネットワーク全体では中心性が高かった。

次いで中心性が高かった語は「自分」「体」であった。「自分」は「自身」「考える」「好き」

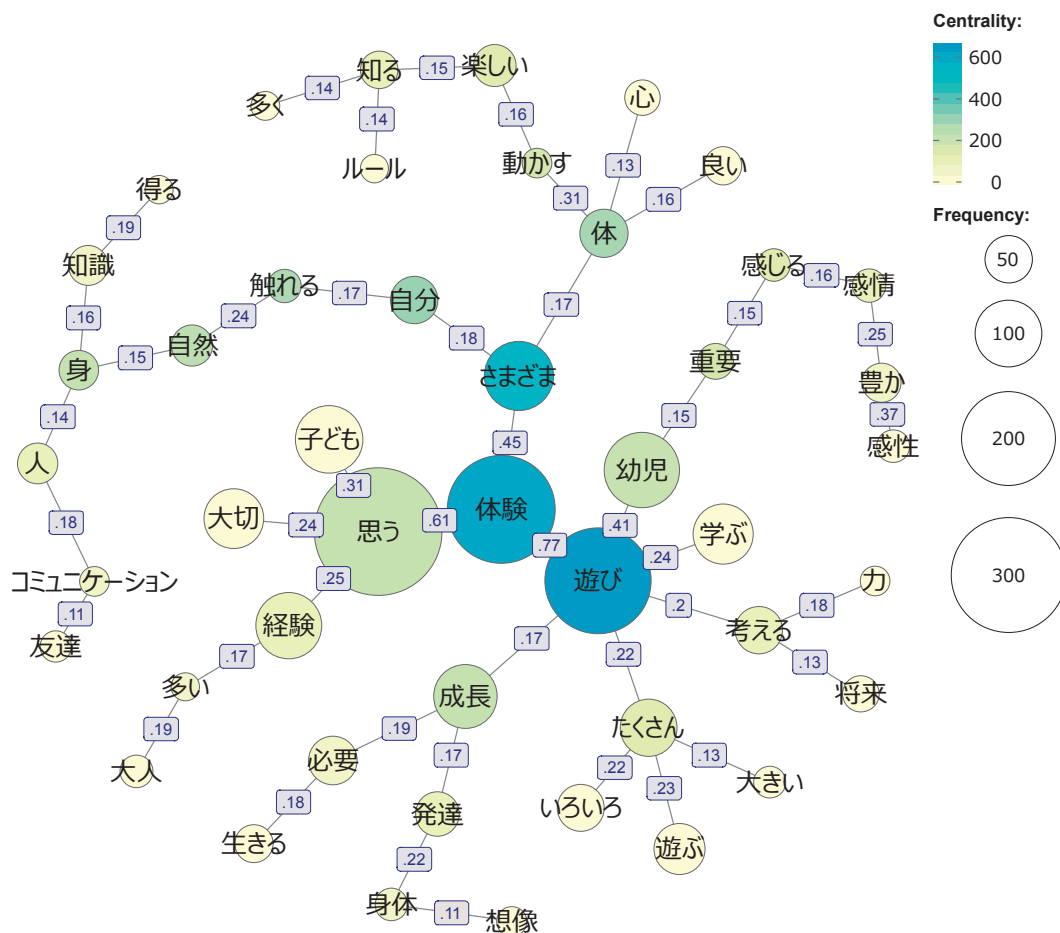


図3. 幼児期における「体験」や「遊び」に対する意識の共起ネットワーク（中心性・媒介）

などの語と共起関係が強く、「さまざまなものに触れる事で自分自身が形成されていく」、「自分で考えたり工夫したりする力がつく」、「自分が好きなことを思いきりすることができる」などの文脈で出現していた。また、「体」は「動かす」「遊び」「たくさん」「発達」などの語と共起関係が強く、「遊びを通して体を動かす楽しさを知る」、「自然に触れさせた遊びは、体でたくさん感じ取ることができる」、「体の発達を促すとともに、心を大きく成長させる」などの文脈で出現していた。

これらの他、「自然」「触れる」の中心性も高かった。「自然」は「触れる」「体験」「触れ合

う」などの語と共起関係が強く、「自然に触れて体験をすることによって将来自分の生活に役立つ」、「特に自然と触れ合う体験や遊びが大切」などの文脈で出現していた。「触れる」は「さまざま」「見る」などの語と共起関係が強く、「自分の五感を通して体験し、さまざまなことに触れていく」、「目で見て、触れて、体験することで、子どもの豊かな感性が育まれる」などの文脈で出現していた。

IV. 考察

1. 体験活動の実態からの検討

本研究における保育者養成校の学生の体験活動の実態と全国調査との比較の分析結果について、各体験に分けて検討する。

まず、【自然体験】であれば、9項目のうち7項目で「何度もある」と回答した割合は全国調査を上回っていたことから保育者養成校の学生の体験活動の頻度は決して少ないものではないことが窺える。ただし、保育者養成校の学生の方が全国調査と比べ、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」といった比較的活動強度が高い体験や宿泊を伴う体験は少ない傾向にあるとも考えられた。よって、井上¹⁵⁾の保育者を志望する学生に自然体験等が不十分という指摘に則って考えれば、自然体験の量が不十分なのではなく、質が不十分なのであり、自然体験活動、野外実習が学生に好影響を及ぼしたという先行研究はその質的な面を一定程度、補完した結果であったと推察できる。しかしながら、森田ら¹⁶⁾の実践事例でも言及されているように、宿泊を伴うキャンプなどは日数の確保や人材不足により実施できない養成校があること、周囲の自然環境が豊かではない地域もあることから、学校内や地域周辺を活用し、実際の保育実践を想定した体験が重要になると考えられた。その意味では、溝邊ら¹⁷⁾の報告にある「講義と体験活動を連動させた授業」の展開は非常に実態に即した実践であると言える。したがって、学生には一定の体験の素地があることを認識した上で、それをきっかけに直接体験することを通じて、体験活動の意義や知識、基本的な指導技術を学び、将来の保育実践へつながる授業等が有効だろうと考えられた。

一方、【生活体験】において、保育者養成校の学生は豊富な生活体験、特に乳幼児との関わりが多いことが大きな特徴のひとつであると考えられた。長谷部¹⁸⁾は、保育者養成校への進学志望動機として、得意とする保育分野における自らの力を伸ばすことを明確な進学目的としていることを明らかにしており、本結果はその背景にある要因とも推察できる。これは【社会体験】においても【生活体験】同様の結果であ

り、全ての項目で「何度もある」と回答した割合は全国調査を上回っていたことから、教育と福祉の領域を学び、保育者を志す学生が多く在籍していることが結果の一因と考えられる。しかしながら、本研究では全国調査との比較を行うため、質問内容を同一のものとしていることから、これらの結果には大学進学後の体験が影響している可能性もあると考えられる。さらに、小島¹⁹⁾は「子どもが好きだからそれを職業にしたいという単純な意識」「とりあえず資格がとれるから」という安易な考えの進路選択をしている学生も少なくないことを指摘していることから、本結果を肯定的にのみ捉えることは現実的ではない。また、神長²⁰⁾は専門職としての保育者について「子どもに優しい」「子どもが好きだから」を超えて、子どもへの愛情を基盤にした保育行為の意味について、保育に関する専門的な知識や技術と結び付けていくことが重要であると述べており、保育者養成校の学生がこのような意識を持てるよう支援していくことが求められる。

2. 体験活動に対する意識の検討

(1) 頻出語と出現傾向

保育者養成校の学生の体験活動に対する意識の計量テキスト分析の結果について、検討する。まず、幼児期における「体験」や「遊び」に対する記述から見られる頻出語とその出現傾向からは、学生の体験活動に対する意識の方向性を捉えることができた。学生は、保育の対象である「幼児」(「子ども」)にとって「さまざま」な「体験」や「遊び」をすることは、学びであり、「成長」する上で「必要」なものだと認識していた。そして、「自分」の「体」を使って「たくさん」遊ぶことは「楽しい」ことであり、体験や遊びの中で「自然」や「人」と関わっていくことで、多くのことを「身」につけていくと理解している。この点において、学生は幼児教育施設の3法令にある、幼児は身近な環境に自発的・主体的にかかわるといった直接的・具体的な体験を通して、成長・発達していくという一貫した教育理念を理解していると考えられる。また、幼児教育においては小学校以降の教育と異なり、教科書がない代わりに、身近な「環境を通して行う教育」が基本であること、幼児期の教育は生き

る力の基礎を育むものであり、その後の未来につながっていくという今次の3法令改訂(定)の要点についても重要視している傾向があると考えられた。

(2) 階層的クラスター分析

次に、頻出語の階層的クラスター分析の結果から検討を加える。本研究では、テキストデータ全体から、7つのクラスターが形成された(図1)。各クラスターに含まれる語とコンコordanスをを用いて分析した共起関係からどのような類型化がなされたのかの解釈を試みた。まず、クラスター1には、「思う」「体験」「遊び」「幼児」などの語が含まれており、前述の頻出語と出現傾向の結果から見られた「幼児にとって体験や遊びは…だと思う」という記述が多く見られたことに起因していると言える。よって、各クラスターの内容を内包し、体験や遊びの意義を説明するものであると考えられた。

クラスター2では、「人」「知識」「身」「友達」「コミュニケーション」などの語が含まれており、共起関係を見ると「主体的に人とかかわる体験による学び」が示されていると考えられた。これは保育内容の領域「人間関係」のねらい、10の姿では「道徳性・規範意識の芽生え」を現わしていると言え、きまり(「ルール」)の必要性に気づき、自己調整力が育まれることを指していると考えられる。クラスター3では、「成長」「必要」「発達」「身体」が含まれており、「成長や発育発達に必要」であることが、続くクラスター4では、「自分」「考える」「楽しい」「生きる」が含まれており、「自発的な体験による生きる力の育ち」が示されていると考えられた。また、クラスター5では、「子ども」「経験」「学ぶ」「大切」が含まれており、「子どもの遊びの大切さ」が示されていると考えられた。これらを総合すれば、保育方法の基本にある「遊びを通しての指導」²¹⁾を現わしていると言え、遊びを通して5領域のねらいが達成され、生きる力の基礎が育まれることを指していると考えられた。クラスター6では、「豊か」「重要」「感情」「感性」などの語が含まれており、共起関係を見ると「豊かな感性や感情発達に重要」であることが示されていると考えられた。これは保育内容の領域「表現」のねらい、10の姿では「豊かな感性と表現」を現わしていると言え、体験の中

でいろいろなものや出来事に触れ、イメージを豊かにすることを指していると考えられる。クラスター7では、「体」「自然」「良い」「触れる」などの語が含まれており、共起関係を見ると「体を動かし、自然に触れることの良さ」が示されていると考えられた。これは保育内容の領域「健康」及び「環境」のねらい、10の姿では「健康な心と体」及び「自然との関わり・生命尊重」を現わしていると言え、戸外で心と体を十分に動かし、自然と触れ合う中で興味や関心を広げていくことを指していると考えられる。

以上より、クラスター分析では、各クラスターに含まれる語と共起関係から、学生の体験活動に対する意識を具体的に解釈することができた。7つのクラスターの解釈から、クラスター2・6・7は、保育内容の5領域や10の姿と関連した具体的な幼児の育ちの様相を示すまとまりであった。また、クラスター3・4・5は体験や遊びは保育方法の基本に則っており、それが幼児の生きる力の基礎を育むものであることを示していた。そして、クラスター1はこれらを内包し、幼児期の体験や遊びの意義を説明している。すなわち、保育者養成校の学生は体験活動とは、幼児教育実践の基本原則に基づいて行われるものであり、保育内容の5領域や10の姿の育ち、ひいては生きる力の基礎を培うものと認識していることが分かった。

(3) 共起ネットワーク分析

最後に、頻出語の共起ネットワーク分析の結果から検討を加える。本研究では、共起関係の強さから共起ネットワークにてグループ分けを行い、その関係性を分析するサブグラフ検出と、ネットワーク構造の中で語の中心性を探索する方法を採用した。その結果、サブグラフ検出では、共起ネットワークは7つに分かれた(図2)。各サブグラフの共起関係の強さから解釈すると、サブグラフ①(以下、丸囲み数字はサブグラフの番号01~07を表す。)は、「体験や遊びの教育的意義」を示すものであると考えられた。特に、体験や遊びは学びにつながる大切なものと捉えていると考えられた。これに関連して、④では、「心身の成長や発育発達に必要」であり、身体的な発達だけではなく、想像力といった精神的な発達にも通じており、これらが生きる力の育成につながっていた。また、⑥は、

「豊富で多様な遊び」が、⑦は、「将来につながる経験」への注目が示されていると考えられた。一方、②では、「自然や人との自発的・主体的なかかわり」に関するものであり、保育内容の領域「環境」の内容にある「自然の不思議さ、季節の変化、生命の尊さに気づく」、「人間関係」の内容にある「友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう」といった身体化された「知識」を得るという育ちに注目していると考えられた。③は、「体を動かす楽しさとルール」に関するものであり、保育内容の領域「健康」の内容にある「遊びの中で十分に体を動か」し、楽しみながら「安全に気をつけて行動する」といった生活や行動の仕方（「ルール」）を学ぶ様相に注目していると考えられた。⑤は、前述のクラスター分析の結果（クラスター6）でも見られた「豊かな感性や感情発達に重要」であることが示されていると考えられた。

以上より、7つのサブグラフの解釈から、①・④・⑥・⑦は主に「体験や遊びの教育的意義と学びの連続性」を示しており、保育のねらいや内容による学びを得るために遊ぶのではなく、充実して遊び込んだ結果、ねらいや内容が達成される、つまり日本の幼児教育の目標である生きる力の基礎を自然に身につけていく機会として捉えていると考えられた。②・③・⑤は、幼児は遊びから全てのことを保育内容の領域を横断して相互的・総合的に体験的に学び、育つことを示していると考えられた。

なお、共起ネットワークの中心性の探索をした結果(図3)では、「体験」「遊び」「さまざま」「自分」「体」「自然」などが高い中心性を示していた。これは分析に使用した頻出語の中で、学生が特に意識していることを現わしている。よって、この結果から保育者養成校の学生は幼児にとっての体験や遊びに対して、「体験や遊びの教育的意義」や「運動遊びや自然体験による育ち」に特に注目していることが示唆された。

V. 結論

本研究では、保育者養成校の学生を対象に意識調査を実施し、学生の体験活動の実態を把握するとともに、学生が持つ体験活動に対する意識について計量的に明らかにし、養成段階で取

り組むべき支援の在り方について示唆を得ることを試みた。

その結果、保育者養成校の学生の体験活動の実態としては、自然体験をはじめ量的な面での不足は見られなかったものの、種類や内容といった質的な面が不足していることが示唆された。よって、保育者養成校の学生には一定の体験の素地があることを認識した上で、前迫²²⁾が述べる「知識注入型ではなく、直接体験型のフィールドワーク」などを通して体験活動の意義や知識、基本的な指導技術を学ぶことによって、より保育実践の文脈に近づくことができると考えられる。

また、保育者養成校の学生が持つ体験活動に対する意識については、頻出語と出現傾向、クラスター分析、共起ネットワーク分析の結果より、「体験や遊びの教育的意義」並びに「体験や遊びを通じた具体的な幼児の育ち」なかでも「運動遊びや自然体験による育ち」に関する認識として2つにまとめることができた。前者では、幼児にとっての体験や遊びは幼児教育の基本原則に基づき実践され、生きる力の基礎を育むものとして認識していることが分かった。後者では、幼児にとっての体験や遊びは保育内容の5領域全てに関わるものであり、相互的・総合的に幼児の育ちにつながるものとして認識していること、特に自然との関わりや運動遊びは、あらゆる領域に関わって子どもの発達に寄与するものと捉えていることが分かった。したがって、保育者養成課程では実際の保育実践を考える上で、谷田貝ら²³⁾が述べる「幼児を理解する視座の多様性」が得られるよう、継続性と総合性を持った支援が求められていると考えられた。

本研究では、以上のような成果が得られたものの、保育者養成校の学生が実際にどのような保育実践を望んでいるのかを明らかにするまでは至らなかった。これは養成校における授業実践や学生支援をより充実したものにする資料になると考えられるため、次なる研究の課題としたい。さらに、本研究では全体の傾向を把握するため分類は行わなかったが、今回の研究対象者は限定的であったことから、地域性や個々の特性、体験活動の多寡による意識の違いという視角からの検討も発展的研究として望まれる。

付記

本研究は、日本野外教育学会第22回大会にて発表したもの²⁴⁾を大幅に加筆・修正したものである。なお、執筆のために独立行政法人国立青少年教育振興機構から「青少年の体験活動等に関する意識調査(平成28年度調査)」の個票データの提供を受けた。ここに記して謝意を表する。

引用文献・注

- 1) 「生きる力」とは「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する能力」「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」とされている(文部省編(1996):21世紀を展望した我が国の教育の在り方について・中央教育審議会第1次答申、ぎょうせい、20-21)。
- 2) 中央教育審議会(2007)「次代を担う自立した青少年の育成に向けて(答申)」の中では、体験活動を、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」と定義している。多様な活動がこの「体験活動」に含まれるが、中央教育審議会(2013)「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」では、体験活動の内容に応じて、次の3つの体験に分類している。第1に、放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事などの「生活・文化体験活動」、第2に、登山やキャンプ等の野外活動を指す「自然体験活動」、そして第3に、ボランティア活動や職場体験、インターンシップなどの「社会体験活動」である。
- 3) 文部科学省(2018):第3期教育振興基本計画、https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf、2020年3月23日参照
- 4) 独立行政法人国立青少年教育振興機構(2019):青少年の体験活動等に関する意識調査(平成28年度調査)報告書
- 5) 独立行政法人国立青少年教育振興機構(2018):子供の頃の体験がはぐむ力とその成果に関する調査研究報告書
- 6) 井上美智子・無藤隆(2007):幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態、大阪大谷大学教育福祉研究、第33号、1-9
- 7) 井上美智子(2008):保育者養成系短期大学における自然とかかわる教育内容:実施実態と課題、

こども環境学研究、Vol.4, No.2(通巻10号)、54-59

- 8) 大橋伸次・後藤範子(2009):保育者志望学生の自然体験に関する意識調査、国際学院埼玉短期大学研究紀要、第30号、69-74
- 9) 高野牧子・打越みゆき・山田英美(2011):保育者養成における野外教育、山梨県立大学人間福祉学部紀要、第6号、15-20
- 10) 樋口耕一(2014):社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—、ナカニシヤ出版
- 11) 形態素とは、言葉が意味を持つまとまりの単語の最小単位。言葉を意味のある最小単位に分けて、名詞、動詞、形容詞、副詞、助動詞の品詞を区別する分析。
- 12) KWICは、「Keyword in context」の略であり、コンコーダンス(concordance)は「用語索引」のことである。よって、KWICコンコーダンスとは、特定の語を前後の文脈を併せて表示する索引機能のことである。
- 13) Jaccard係数とは、語と語の共起関係の強さを表示する係数である。類似性測定を行うものであり、0から1までの間をとる。関連性が強いものほど1に近似する(0.1:関連がある。0.2:強い関連がある。0.3:とても関連がある。)
- 14) 前掲書13)、160
- 15) 前掲書10)
- 16) 森田清美・笠岡典美・庄子いと子(2014):自然体験活動を推進する実践授業の試み~保育者養成課程を例にして~、東北文化学園大学保健福祉学研究、12号、37-51
- 17) 溝邊和成・永井毅(2019):保育者養成課程における授業改善に関する研究—講義と演習を連動させた授業に対する受講学生の意識—、立命館大学立命館産業社会論集、第55巻第1号、193-203
- 18) 長谷部比呂美(2008):進学志望動機に関する検討—保育・幼児教育専攻学生を中心として—、淑徳短期大学研究紀要、第47号、135-149
- 19) 小島千恵子(2012):保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究—実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に—、名古屋柳城短期大学研究紀要、第34号、157-167
- 20) 神長美津子(2015):専門職としての保育者、保育学研究、第53巻1号、94-103
- 21) 文部科学省(2016):幼児教育部会における審議の取りまとめについて(報告)、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/fieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf、2020年3月23日参照

- 22) 前迫ゆり (2006)：環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育、奈良佐保短期大学研究紀要、第14号、63-81
- 23) 谷田貝公昭・大沢裕 (2018)：新版・幼児理解、一藝社
- 24) 庄子佳吾 (2019)：保育者養成校における学生の体験活動に関する一考察、日本野外教育学会第22回大会プログラム・研究発表抄録集、86-87